
楽園の誕生

催吐剤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園の誕生

【Nコード】

N0417P

【作者名】

催吐剤

【あらすじ】

私は通勤電車を待っていた。その日もいつもと変わらない一日になるはずだった。隣に並んだ男が発した言葉さえなければ……。

プラットホームで通勤電車を待っていると、隣に並んだ男が言った。

「俺はな？ おちんぼなんだよ」

男の声は朝のプラットホームに響き渡った。男の発した言葉は、特にその四文字の単語は、電車を待つ人々の視線をことごとく男に吸い寄せ、同時に人々から言葉を奪った。

プラットホームは静寂に包まれた。当然私も例外ではなく、私は右隣に立つその男へと顔を向けた。

と、男と目が合った。それがいつからなのかは分からないが、男は私を見ていたのだ。

つまり、先の男の告白は私に向けられたものだということだ。

そのことに気づいた瞬間、私の心臓は跳ねあがり、全身から汗が噴き出した。身体が震え、奥歯がカチカチカチカチと鳴るのを止められなかった。

そして、私の両目からは涙が滂沱と流れ出した。

私の胸に去来したのは感動だった。とてつもなく大きな感動だった。そして、この上もない歓喜だった。

目の前におちんぼがいた。

“何故ここにおちんぼが” “本当におちんぼなのか” といった疑問が脳裏に浮かび、すぐに消えた。

男はまさにおちんぼそのものだったのだ。まごうかたなきおちんぼだった。ただおちんぼで、あるがままにおちんぼで、そして私にはそれで、それだけで充分だった。

「わたしは……」

私は声を振り絞った。しかしそれは呻き声にもならず消えた。

おちんぼに出会えた奇跡で、私は息を吸うのも忘れていたのだ。

息を大きく吸い込み、私は叫んだ。

「わたしはおまんこです」

人々の視線が今度は私に集まったが、おちんぼを目の当たりにしている私には気にならなかった。

声の限りに叫んで息をつく私に男……いや、おちんぼは手を差し伸べ、私も手を差し出した。

私の震える手をおちんぼの手が優しく、しかし力強く握りしめた。その頼もしい感触に私は“ああ、おちんぼだ、おちんぼなのだ”と思った。

深い安堵を憶えた私は腰が抜けてしまった。よろめいた私をおちんぼは抱き寄せた。

どこからかまばらな拍手が聞こえ、やがてそれはプラットホームを包みこむまでに成長した。

響く拍手と歓声の中、私たちは一つのおちんぼとして、一つのおまんことして、強く、強く、抱きしめ合い、一つとなった。

見守る人々も私たちと同様に一つのおちんぼとして、一つのおまんことして一つとなり、連鎖反応のように皆が一つとなっていくのだった。

電車が到着した。乗客たちはプラットホームの様子に目を見開いて驚いていたが、すぐに彼らも一つとなった。

私の心には、この連鎖反応が徐々に広がっていき、やがて世界中のおちんぼとおまんこが一つとなる光景が浮かび、おちんぼの心にも同じ光景が広がっているのが分かった。

こうして地上に樂園が誕生した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0417p/>

楽園の誕生

2010年12月29日20時41分発行